

## 意志することそのものの否定がなぜ力への意志の本質をなすのか

ニーチェの『ツァラトゥストラ』における意志概念の不可解さ

大山真樹(中央大学・院)

本発表は、ニーチェの『ツァラトゥストラ』における意志における創造の作用を、感情に自由を感じ直させる作用として復元し、価値の創造が本質的に過去に関心を置くものであることを示し、生きることと価値評価とが、根源的に同一であるにもかかわらず、ただあるようにあるだけの生としかじかであるべしという価値評価とに苛酷な仕方で分裂せずにはいられないことを明らかにせんと企図するものである。

成熟期のニーチェの哲学を解釈していくうえで、神の死、力への意志、永遠回帰、超人などのうち、どのキーワードを中心概念に据えるかは、研究の方向性を大きく左右する。さらにまた、そうした中心概念に対するニーチェの言及をどのような枠組みの中で理解するかによって、当該の概念が演ずる役割も大きく異なってくる。

従来のニーチェ受容の趨勢において、力への意志およびこの意志に具わる様々な作用に言及するニーチェのテキストは、力への意志に内在する危険性に光を当てるものであるというよりもむしろ、力への意志および生きることそのものへの賛美の一環として自明視されてきた。

しかし、こうした解釈の枠組みには、かなりの限界がある。力への意志の様々な性格描写を生きることの賛辞とみなす解釈の枠組みを採用すると、ニーチェの批判対象となっていた道徳・宗教・芸術・近代性の位置付けが非常に難しくなるからである。道徳・宗教・芸術らは、自らの視角（パースペクティヴ）に応じた様々な価値評価を持っている。しかし、こうした価値評価は、紛れもなく力への意志による価値創造の産物である。とすると、ここに、一方で力への意志による価値創造の作用そのものを賛美するニーチェと、他方で力の意志による価値評価の内ある特定のものを例外的に非難するニーチェとの間の不整合が生ずることになる。なぜ、道徳・宗教・芸術・近代性は、例外的に非難されねばならないのか。例えば、道徳は、価値の新しい創造を妨げ価値評価を硬直させるからである、といった辻褄合わせができるかもしれない。しかし、価値を堅く守ろうとする価値評価が価値を次々と打ち棄てていこうとする価値評価に劣るのはなぜか、という問いを突き付ければ、こうした辻褄合わせは直ちに行き詰まる。というのも、それぞれの価値評価にはそれぞれの価値評価の言い分があるからである。

こうした解釈の行き詰まりを克服するためにも、力への意志に具わる価値創造の作用に対するニーチェの言及を力への意志への賛辞とみなす解釈の枠組みを捨て、価値創造の作用についてのテキストを力への意志の持つ本質的な危険性の分析および批判として再解釈する必要がある。

価値創造の作用を生きることそのものに対する危険性の批判とみなす本発表の解釈において、力への意志による価値評価の作用は、概ね次のように分析される。

力への意志の内部には、少なくとも、自らが優れているか否か、自らに力があるか否かを感じずる感情の作用と、既に感じられている感情と視角に応じて自らが優れており力があるとみなすための価値を創造する（狭義での）意志の作用とが存在する。力への意志についてのニーチェによる描写は非常に多岐にわたるため、力への意志に内在する諸々の作用は、この二者に汲み尽くされることは決してない。しかし、少なくとも、既存の価値評価であれ、自ら作り出した価値評価であれ、価値評価に適った自らの振る舞いそのものを新たに創出する作用は、力への意志に具わっていない。つまり、力への意志は、価値に適ったことを要求するだけであり、その要求に具体的な形を与え行為として形成することはできないのである。そのため、感情の作用が自らを価値に適ったものであると感じられるか否かは、まったくの偶然に委ねられており、実際「そうあった」ということに左右される。こうした過去の偶然性に翻弄されている感情が、自らを価値評価にもとるものと感じたとき、新しい価値を作り出し、感情に自らを感じ直させるのが、力への意志における価値創造の作用にほかならない。過去の偶然性の支配下にある感情に慰めを与えることこそが力への意志による価値創造の意味なのであり、そこにおいてはもっぱら過去という時間に関心が置かれている。

このような構造から理解されるように、力への意志における価値創造は、過去の偶然性から引き出された負の感情に対する埋め合わせ、という役割を演ずることを自らの本質としている。しかし、力への意志にできることは、せいぜい、過去の出来事に対する価値評価を変更することでしかなく、過去そのものを無くしたり変えたりすることはできない。それどころか、過去に対する新たな価値評価の背景では、その底意として、過去の出来事に対する負の感情と過去の出来事の揺るがなさと感じ取られている。したがって、力への意志は、遅かれ早かれ、それと対峙しつつ、そこからの解放を求めて、自らが価値を創造していた当該のもの―すなわち過去そのものをに対する無力さに直面せざるをえない。どれほど周到に過去を塗り替えようとしても、過去を塗り替えようとする意志そのものが過去の揺るがなさをよく知っているのである。そのため、過去の揺るがなさを明晰に自覚した意志は、もはや新たに価値を創造することを止めようとする。